

らららん7号



2019. 9. 4

「夏休み」で思い出すこと

私が大殿小学校へ勤めていたときの夏休みのことです。もう8～9年前になりますが、お盆のころだったと思います。学校で仕事をしていると、地域の方から電話がありました。「ああ、また苦情の電話かな？」と思いました。しかし、内容は違っていました。その電話はこんな感じでした。

日赤口から上山口駅の踏切を渡ると、善生寺へ通じる長い階段があります。もう夕方近くになっていたと思います。一人の少年、たぶん5～6年生だと思うのですが、階段を上っていきました。それからかなり時間が経ったのですが、その少年は降りてきません。だんだん気になって、ついに私も階段を上って、少年の様子を確かめに行きました。

すると、その少年は一心にお墓の前で拝んでいました。気になって声を掛けると、数ヶ月前にお母さんを亡くし、これまでの出来事を報告していたのだと答えてくれました。驚きましたが、本当に感心しました。そんな子がいる学校って、素晴らしいですね。



この地域の方からの電話は、私も本当に嬉しく思いました。子どもの名前は聞けなかったのですが、どんな子だろう？と、とても気になりました。そこで、5～6年生の先生に「最近母親を亡くした男の子はいますか？」と聞きました。「N君がいますよ。該当するのは彼だけです」と先生が教えてくれました。電話の内容を話すと「ああ、それは彼でしょうね」とはっきり答えてくれました。「本当に優しい子なんです。辛かったと思うのですが、よく頑張っています」ということでした。

私はN君に話を聞いたりしなかったのですが、お母さんにいろいろと報告したいことがあったのだろうと思いました。嬉しかったこと、悲しかったこと、よく頑張ったことなど、次から次に心に浮かび、お墓の前を立ち去ることができなかつたのでしょう。

彼の場合は、話したいお母さんがいなく、なおさら伝えたいという思いが強かつたので

しょう。また、彼は話を伝えるだけではなく、お母さんの声も聞こえていたのではないかと思います。生前のお母さんが話していたことを思い出しながら、彼は答えを見つけていたのかもしれませんが。

お母さんと一緒に暮らしていても、誰もがよく話し合っているかという「できてないかも？」という声が返ってきそうです。指示的な言葉を矢継ぎ早に浴びせられたり、行動を鋭く指摘されたりすれば、都合の悪いことは伏せておきたいという気持ちが子どもに働くこともあるでしょう。

子どもの心はどんどん成長していきます。心の中を見ることはできないのですが、本当の気持ちを聞いてみると「こんなことを考えていたのか？」と驚くことがあります。子ども自身は不安や期待感など、その時々でいろいろ考えているのです。自然な会話から子どもの気持ちを解きほぐすことができるので、小さいお子さんに対しても、親子で素直な気持ちを話し合う場があるといいなと思います。でも、唐突に「話をしよう」と切り出しても、なかなかうまくいかないでしょう。ふだんから、話しやすい関係づくりに心掛けるべきです。

まだまだ先の話になるでしょうが“子どもが成人したとき”や“子どもにお世話(介護)をしてもらうとき”などで、話しやすい関係はとても大切だと思います。子どもの気持ちに耳を傾け、また、大切なことは子どもにきちんとアドバイスし、それを真剣に聞いてくれる、そんな姿を思い描いて、接していくことが大切だと感じました。

親子が横断歩道を渡っていた

7月末、市内を車で走っていました。山口駅前の交差点で、信号が赤になったので車が停止しました。私の車もその一台でした。何人かの歩行者が渡り、しばらくすると歩道の緑信号が点滅し始めました。そんなときに3組の親子（いずれもお母さんと幼稚園児くらいの女の子）は、横断歩道を渡り始め、センターライン近くで、信号は赤に変わりました。3組は少し急いで信号を渡りきりました。手をつないだ小さい子も一緒に渡ることができました。でも、いちばん後ろを、小学校高学年らしいお兄ちゃんが歩いていたのです。彼は、信号が変わりそうになったので、無理をしないでもう一度青になるのを待つことに決めたようでした。すると、反対側のお母さんたちが「何で渡らんやったの？」と叱責するように声を出しているではありませんか。確かに後ろを歩いていたのでタイミングが悪かったのは事実ですが、彼は責められなければいけないのでしょうか。

私は思いました、彼をほめてやってほしいと。信号が点滅し始めて、すぐにでも色が変わるなら、無理をしない方が賢明なはずですが。彼は自分の判断で、正しいことを選択できたのです。渡ってしまった親たちの声は、車の中までは聞こえませんでした。が、「ポーと後をついてきたからでしょ」等の声だったのでしょう。また、「あなたを待たなければいけない私たちの気持ちをわかってよ」という声が聞こえてきそうです。

私は彼のほうが、冷静な判断ができていたと思いました。こんなとき「自分でよく判断できたね」と言ってあげてほしかったです。あわてて歩道を渡り切ろうとしたり、急に引き返したりして、事故につながるケースは意外に多いのです。子ども自身が危険を予測したり、回避したりする力を育てるように、幼稚園も小学校も力を入れているのです。